

SEKAI

岩波書店

2008

May

no.778

# 世界

# 5

特集 **食と農の危機**——冷凍食品事件から見えてきたもの

大野和興……鈴木宣弘……辻井 博……神山美智子……佐藤剛史……山本博史 ほか



# 「コメディ」を見たい、つくりたい!

—人生ほど素敵なシヨ—はない

三谷幸喜(劇作家・脚本家・演出家)、福田陽一郎(脚本家・演出家)

「靖国」という空間への接触——国家的フィクションを撮ったノンフィクション……

李繆(映画監督)

花岡和解の事実と経過を贈る……

田中宏(龍谷大学)

二〇〇八年米大統領選観戦記……

米谷ふみ子(作家)

「竹槍の村」に墜ちたB29(下)……

グレゴリー・ハドリー(新潟国際情報大学)、訳〓石井信平

沖繩という窓——心病む人の居場所……

山城紀子(フリーライター)

片山善博の「日本を診る」(5)——福田内閣がダメな三つの理由……

片山善博(慶應義塾大学)

延安紀行(9)現代史の畠野へ……

リービ英雄(作家)

アジア女性交流史・昭和期篇(13)戦争の生んだ二人妻は——藤原道子と山崎アイン(上)……

山崎朋子(作家)

水彩紅楼夢(23)……

小林恭二(作家)

脳力のレッスン(73)——問いかけとしての戦後日本(その2)——米国のTV映画が日本人に埋め込んだもの……

寺島実郎

閣下とジャック(17)……

Jun Machida

世界論壇月評……

朱建榮・竹田いさみ・吉田文彦・石郷岡建

ドキュメント激動の南北朝鮮(130)……

編集部

グラビア Palestine 2006——公募作品65……

金田和夫

グラビアについて(公募規定)……

アムネスティ通信……

読者談話室……

編集後記……

# 「竹槍の村」に 墜ちたB29

(下)

グレゴリー・  
ハドリリー  
訳者＝石井信平

墜落するジョーダン機。目撃者によるスケッチ。



Gregory Hadley

新潟国際情報大学教授。

いしい・しんぺい

翻訳家・著述家。訳書にイアン・ブルマ『戦争の記憶』など。

世界 SEKA! 2008.5

## 墜落するB29からの脱出

焼山村では村人たちが群がり、一斉に「万歳！」を叫んだ。桑原さんが「クワバラクワバラ」と唱えた。語呂合わせであり、悪魔払いの呪文でもあった。この冗談に人々は笑った。今まさに鬼畜アメリカが空から追い落とされたのだ。

しかし、即席のお祭りはすぐさま静まった。一人一人が空を断ち割って生じた恐怖の裂け目を凝視した。炎上するB29は、彼らを目がけて突っ込んでこようとしていた。

トランプはジョーダンに、阿賀野川沿いに飛んで山岳地帯に向かうよう航測資料を渡した。ジョーダンはそれに従い、対空砲火から逃げようとした。彼は被弾したエンジンの停止を試みたが、プロペラは回転をやめなかった。対空砲は機体の給油管を切断し、コントロール不能にしていた。摩擦熱でガソリンが引火した。炎が点滅し始め、明るさを増した。左翼エンジンは炎上し始めるだろう。機関士のマクグローは給油管を伝わって左右両翼に火の手が上がると予測した。制御席で内側エンジンへの給油を止め、プロペラのフェザリングを試みた。だが、火の勢いはそんな努力の一切を無視した。ジョーダンは消火のために、何度も機体の急降下を試みた。三回目の急降下で火が消えた。誰もが我が身の幸運を信じられなかった。「やったー」、全員が安堵のため息をついた。

だが、幸運にひたるには早すぎた。炎が再びあがった。一層の凶暴さで、火は貨物室にまで広がった。後部キャビンで

グラントを防護していたプラスチック製防弾壁が溶け始めた。「後部はどうだ？」インカムでジョーダンが聞いた。「俺たちはOKだ」、グラントは答えた。「そっちはどうなってる？」「やられたよ」とジョーダンは言った。音声が届がみ、雑音の向こうから「駄目だ」という声がかすかに聞こえた。

闇夜に流星の飛翔しながら、炎は機体を這って尾翼の後方に長く伸びた。他のB29に乗っていたクルーは、ジョーダンの飛行機が炎上しつつ飛んでいた光景を目撃している。スベロさえ後部の銃座から炎が容易に見えた。「一体どうしたんだ？」とインカムを通して尋ねた。「やられたんだよ！」グラントは叫んだ。グラントは銃座から離れ、インカムを投げ捨てた。煙の充満と高熱で我慢できなかった。

機体前部では副操縦士ホーキンスが、前方を睨みながら恐怖に身をすくめていた。マクグローは左翼への給油を遮断できなかつたと思案していた。もはや手のつけようがない。有毒ガスがキャビン全体に充満し、油圧が急速に落ちた。

ジョーダンはインカムを通して怒鳴った。  
「すく、脱出だ！ ジャンプの用意をしろ！」

彼はキャビンのライトを点灯したが、煙が充満したキャビンでは無駄だった。ライトが機体の先頭部分で叫んだ「爆弾倉のドアを開くぞ」。ジョーダンは機外のライトをつけ、警報を鳴らし、全員脱出を指示した。

トランプはかさばったパラシュートをまだ装着していない。自分の機体は撃ち落とされぬという自信があった彼は、パ

ラシュートをいつも狭いナビゲーター席の隅に置きっぱなしにしていた。マクグローと通信士ウィルニックが爆弾倉から脱出するのを見て、トランプもパラシュートを装着した。

ジョーダンは立ち上がり、脱出口に向かった。ホーキンスは席に着いたまま前方を見つめていた。「さあ、行くぞ！」ジョーダンは叫んだ。ホーキンスはまったく聞いていないようだった。ジョーダンはホーキンスのヘルメットを剥ぎ取ると「こっちへ来るんだ！」と怒鳴った。ホーキンスは立ち上がり、まるで夢遊病者のような動きで歩き始め、ジョーダンのに従った。トランプはパラシュートのベルトを締めながら、この場面を見ていた。そして、ホーキンスが静かに向きを変え、副操縦士の席に戻るといふ信じがたい光景を見た。トランプは脱出の用意をすませた。脱出前にホーキンスのもとに寄り、彼を揺さぶって叫んだ「さあ、行くぞ！」。ホーキンスは呆然としていた。

トランプは驚いた。火炎は前方の爆弾倉の扉から、キャビンの中にまで達していた。トランプは振り向き、炎の中を脱出した。誰が付いてきたのか、もはやわからなかった。

警報音が鳴り続けた。銃撃手、脱出開始。リーダーオペレーター、アダムス、脱出開始。

グラントは爆弾倉の扉に向かった。パークルが下を見て凍りつき、出口を塞いでいた。「飛び降りろ！」、グラントはパークルを突き飛ばして叫んだ。彼は一瞬にして闇夜の煙となつて消えていった。その後、グラントはこの件で夜通し懊悩

した。自分は親友を殺したのか？ いや、パークルはきつとうまくやったよな？ 彼が振り向くと、スペロが後部銃座から這い出て来て同僚に叫んだ。「オレも行く！」。暗闇でアダムスの声が聞こえた。「お前の、すぐ後ろにいるよ！」。

グラントは脱出した。パラシューートのヒモを引っ張り、左を見ると機体が完全に炎に包まれ、ゆっくりと円を描いて落下していった。左翼がポッキリと折れた。機体は秋のモミジのように回転し始め、火煙を吐き、四方に残骸を撒き散らしながら落ちていった。地震のように大地が揺れた。

焼山村は呆然とした静けさに包まれた。飛行機はもう燃えてはいなかった。漆黒の闇である。B 29の機体の脇を、再び小さな炎が舐めた。火勢が強くなり、互いの顔をはつきりと認識できた。二機のB 29が頭上を飛んでいく。皆、思わず空を見上げた。誰かが驚いて叫び、空を指した。パラシューートが六つか七つ、京ヶ瀬村近辺の水田の方に降下した。

新潟市内からも、連合軍捕虜を含む多くの人々が、機体から脱出したパラシューートを見ている。ラジオが手短に警告を流し続けた。「敵兵、パラシューートで新潟近辺に降下中、その数未確認」。武装した兵士が降下してくるといふ危険に、人々は動転し、どうすればいいのか囁きあった。

突然、無数の銃撃が闇夜に起こった。銃弾はあちこちに飛び、村人たちの頭をかすめた。パニックが起こり、みんな叫びながら我れ先に四方に逃げた。

火炎がB 29の爆弾倉に達し、村人たちの恐怖も頂点に達し

た。米兵が畑の向こうから銃撃してくるのではないかと彼らは思った。家も家族も容赦なく攻撃されてきたのだから。恐怖が怒りに転じ、この時点から人々の記憶は曖昧になる。

ほどなく警防団の話し声が聞こえてきた。米兵を捕まえるために村の男たちが狩り出された。在郷軍人、消防団員、農民、防空要員、生徒が入り混じり、それに多くの農婦が加わっていた。一部は刀剣や銃器を手になっていたが、ほとんどの者は、竹槍や棍棒、そしてトビクチを持っていた。

米兵探しが続いた。村人の集団は田んぼ、納屋、排水溝などを、獲物を求めて忍び歩いた。懐中電灯を手に入れた者は少なく、ほとんどが闇を手探りで這うように歩いた。

稲穂がかすかな音をたてた。田んぼにポチャンと何かが落ちた。いつもなら夏の夜を和ませる音だが、今夜だけは彼らは怯えた。この闇のどこかに武装した敵が潜んでいるのだ。

### 捕獲された米兵

生還した者はその体験を鮮明に記憶している。何が起こったのか。その典型的な事例として、トランプの体験に戻ろう。本文の冒頭(前号)に証言を紹介したクルーだ。彼は着陸後、一人になった時、不安のあまり自殺を考えた。それを思いとどまり、捕まるのを待った。

太陽が上がり、明るくなった。トランプは、それまで隠れていた田んぼの一角に村人たちがたむろしているのを見た。彼は両手を挙げ、田んぼの水をはねながら彼らに近寄った。

村人たちもこの場面をよく覚えていて、「その兵士は命乞いをしたよ」と語った。弱みを見せたことで彼は命を失いかけた。一人の男がトビクチを振りかざして、喉を切り裂こうとした。別の男と数人の女が竹槍とトビクチを、彼の顔と目を狙って振りかざしてくるのを、トランプは頭を低くして防いだ。全員が彼に襲いかかり、殴打と蹴りが始まった。男たちは彼の両足を一杯に開き、女たちに股間を蹴らせた。

トランプの出血は激しく、蹴られ続けたショックで気絶した。一人の日本兵が割って入り、村人の行為をやめさせたのを、彼はかすかに覚えている。その兵士はトランプの大尉の階級章に気付き、指を一本上げ、憤怒している村人に何かを叫ぶようにして説明した。トランプは、そのジェスチャーから、助かった将校はもう一人いると思った。おぼろげな記憶によれば、彼は目隠しをされてトラックに乗せられた。彼は小さな勝利を胸中に感じた。殴打の最中、決して抵抗せず、悲鳴も上げなかった。トランプたちは縛られ、憲兵隊の尋問を受けるため、新潟市に移送された。その途中、トラックは亀田の村に停車した。物見高い見物人がドツと集まった。道を挟んだ豆腐屋に住んでいた鈴木と北上という名の二人の年配女性が、目隠しされたクルーに近寄った。北上の娘と孫たちは東京空襲の時、煮え立った隅田川で死んだ。二人はトラックの荷台に乗り込み、ノコギリを振りかぶってクルーたちに襲いかかった。

トラック上の日本兵が防御したが、そう簡単には済まなか

った。女性たちは足をバタつかせて悲鳴を上げた。彼女たちが何を叫んだか、記録が残されている。

「こいつらの首をちょん切らせておくれよ。ヘドが出るよ。あたしの息子四人が戦場で殺されてるんだ!」

北上が引きずられながら叫んだ。「こいつらが孫たちを殺したんだ。こっちだって殺さなきゃ気がすまないよ!」

郷土史家たちは怒れる女たちの悲劇的な感情を記録している。忘れられることはない。その言葉は老若男女の思いを代表し、なぜ捕獲した米兵を袋叩きにしたか、その理由を雄弁に説明する。彼女たちの感情を理解すれば、戦争が最良の間を最悪に変えてしまう事実に出会う。やさしいおばあさんの口から、あんな言葉が吐き出されるのを誰が望むだろう。

どこでもそうだろうが、日本でも「おばあちゃん」は優しさで愛情の象徴だ。そのおばあさんたちが取り乱した様子を見て、かえって若い者たちは頭を冷やし、哀れみの思いに立ち返る結果になった。おばあさんたちは自分の家族の終焉を見たのだ。孫たちをあやし、知恵を授けて喜ばせる日々はもう帰ってこない。自分が死んでも仏壇を拝む家族はいない。トラックは新潟市に向けて走り出した。割り切れない思いで帰宅する群衆。その思いは今に至るまで持ち越され、表現するよすがは閉ざされたままである。

### 東京の監獄でのトラウマ

ジョーダン は、ホーキンスも機体から脱出したことを憲兵

隊で知らされた。他の二人が四五口径の拳銃を発射し、取調官によれば「生かしちゃおけない」ことをしてしまった。四人目のクルーは不審な状況で死んだ。

生き残ったクルーは東京行きの列車に乗せられた。護送した兵隊は乗客に彼らを殴らせた。通信士ウィーニックは、途中の駅で列車から引きずり出され、壁に立たされたことを記している。彼の目隠しは外され、兵士がライフル銃を構えて彼を狙っているのが見えた。引き金を引いたが弾倉は空だった。彼らは笑い、錯乱しかけた彼を列車に連れ戻した。

東京に着くと、クルーたちは全員、供述書に加えて、その立場を「捕虜」から「捕獲米兵」に変更する旨の書類にサインさせられた。そして、悪臭とシラミに満ちた監房に入れられた。食事は一日三個の小さなおにぎりだけだった。彼らは定期的な尋問を受け、竹刀で打たれた。B 29搭載の特殊兵器についてや、本土上陸の開始時期といった軍事機密を聞き出すためだった。

一日が過ぎて夜を迎えると、看守は囚人たちに眠る用意を促した。誰もが、血だらけの衣類を相手に三〇分間はシラミ探しに没頭した。どうかシラミが再び襲いかかってくる前に眠りにつけますように。それから暗黙の儀式のように、悪臭ぶんぶんとした身体を、交互に折り重ねた。アフリカ奴隷が船でアメリカに運ばれた歴史スケッチさながらの光景だった。ある囚人は悪臭を放つ便器の穴を、自分の体で塞いで眠った。長い顎ヒゲを生やした者は、顔が便所の汚物にまみれている

ことに気づいて目を覚ました。クルーは周囲の囚人が死んでゆくのを絶望的な気持ちで眺めた。

機体から脱出し、生き延びて捕まったトランプとパークルは、セオドア・フォックスという名のP 51戦闘機のパイロットを記憶している。彼は隣の房に入れられ、火傷がひどく、血だらけで、投獄二日めで発狂した。二人は他の囚人と一緒に、フォックスを何とか助けてほしいと看守たちに懇願した。看守はいずれも笑うか無視の態度だった。三日ほどした夜、フォックスの状況は悪化した。夜、独りで泣き出し、その声は悲鳴に変わった。死に果てる前の彼の悲鳴こそ、ジョーダン・クルーが頻繁に悩まされ、今も続く悪夢である。

看守が彼の房に駆け寄り、「静粛義務違反」だといってフォックスを殴った。パークルは監房の壁の割れ目から見た。フォックスは腹部をひどく打たれ、裂け目から腸がはみ出していた。翌朝、フォックスは気絶して横たわっていたが、監房から引きずり出された。別のB 29の搭乗員、ロバート・マイケルソンは何が起こったかを書いている。

「傷ついた彼は、房を出されると廊下に仰向けに転がされた。誰か分からない人物が来て、男に何か薬品を注射した。彼は死に、大量の馬糞の上に放置された。三日間はそのままだった。我々がこれを知っているのは第一号房にいて、その扉から見る事ができたからだ」

ジョーダン・クルーは三週間にわたって囚われた。そこで戦争が終わった。彼らは自由の身となった。彼らはそのトラ

ウマを癒すが如く、遅い船で帰国した。しかし、無駄だった精神に受けた痛手は、彼らの残りの人生すべてを悩ました。

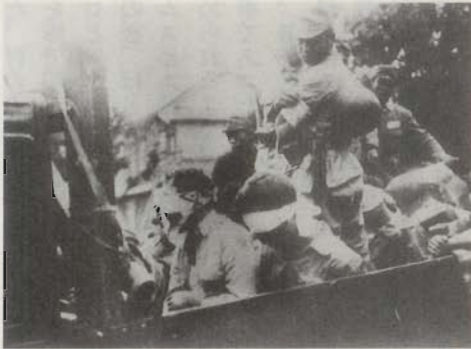
### 民衆の憎悪にさらされた米兵

占領軍が新潟にも進駐してきた。不安と後悔の念が、墜落地の農民を襲った。彼らはすでに機体の残骸をきれいに片付けていたが、現場を調査するアメリカ軍パトロール隊の尋問に備え、自分たちがしたことの記憶を直視する必要がある。

墜落の朝、炎上がおさまると、村人たちは金目のものを求めて機体の中を探し回った。その後しばらくして、一団が一人のクルーの死体を小さな板に乗せてやってきた。彼は捕獲されていたしるしに後ろ手に縛られ、

両足は膝まで黒焦げだった。スベロの死体だった。ほどなくして、憲兵隊の下級将校と兵隊数人が、キャンバスシートにくるんだもう一つの死体を、パラシュートや道具とともに運び、スベロに並べて地面に置いた。その死体は足が折れて捻れ、頭と顔面にはひどい傷があった。アダムスの死骸だった。

二つの死体が到着して、大混乱が勃発した。警防団は村人たちを下がらせようとしたが、殺気立った集団



新潟市に向けて連行されるジョーダン・クルー  
(写真提供 ジョージ・マクグロー、ヴァレリー・ブラティ)

の怒りが死体を乱打し辱めることを押しとどめることはできなかった。アダムスのパンツは引き下ろされ、サツマイモが股間に突っ込まれた。どこかに貴金属はないか、身体中を探られた。

ようやく将校が到着し、棒で叩いて群衆を下がらせた。墜落現場の検証が終わると、彼らは死体を含めて散乱物を片付けるよう言った。ほどなく、村の世話役の目黒啓一が集会を呼びかけた。彼は、少なくとも二人のクルーが武器で反撃し、それが致命的な結果を招いた、と聞いていた。

目黒は、無残な死体が焼山に運ばれた後、京ヶ瀬村公民館と墜落現場に行った。さて、死体をどうするか。皆で話し合

った。「鬼畜米英」の残骸など焼却してしまえばいいと誰かが提案した。しかし、この案は却下された。それは仏式の葬儀に似ている。阿賀野川に投棄することを多くの人が言い出した。しかし中国戦線から負傷して帰還し、再召集を待っていた軍曹、佐藤忠三が猛烈に反対した。彼は、死にそうな目にあつて帰郷を願った点で米兵に共感するものを感じていた。彼は長い熱弁をふるった。「敵地深く飛んで来た勇氣あるやつらだ。名誉の戦死だよ。一片の敬意を払っていいはずだ。国民皆兵の今、武士道に反するようなことは、誰だってやっちゃならん」

結局、死体は埋葬されることになった。村の火葬場近くに運ばれ、墓穴が掘られている間も死体を棒で叩く村人がいた。スベロの頭部はつぶれていた。スベロとアダムスの死体は、それぞれ穴に垂直に埋められた。その後、ほとんど黒こげのライドとホーキンスの死体も、アダムスとスベロの墓の上に放り投げられた。最終的に二人が埋められるまで、その場は共同便所に供された。憎悪の最終行事であった。

いよいよ占領軍が新潟にやってきた。B29とクルーたちに関する尋問が始まったらどうするか。目黒はもう一度村の集会を呼びかけた。長い話し合いの後、彼は別の地域の同様のケースでうまく言い逃れた例を持ち出した。死体は検視のために掘り起こされ、村はずれにある彼の野菜畑に運ばれる予定だった。男たちは卒塔婆を作りモニュメントを装い、盛り土をしろ。女たちは竹を持ってこい。今回は槍ではなく墓の囲いを作れ。子どもたちは菊の花を集めて墓を飾れ。村人は必死で作業に励み、ほどなく立派な墓ができた。その時が来たら、目黒が先頭に立って、村の窮地をしのご手筈だった。

いよいよ占領軍の戦犯調査隊がやってきた。はじめ、彼らは「クルーは墜落時に機内で死亡していた」という村人の話を信じた。「少なくとも三人のクルーは殺害された」という話が広まった。村人は拘束され、長時間の尋問を受けた。目黒の妻はあの暗い日々のことを覚えている。「悪夢でした。何度も何度も、目黒が殺したのだらうと言われ続けました。そうじゃない、分かってほしいという一念でした」

誰も新しい情報を提供しようという意志も可能性もないまま、戦犯調査は進められた。調査隊は新潟捕虜収容所第五分所の所長で、『私は貝になりたい』の著作で有名な加藤哲太郎という大きな獲物をすでに釣り上げていた。事件は沈静化し、なんの変哲もない日々に戻った。しかし、私が話した村人は「B29が落ちた畑を見ない日はなく、そこで何が起こったのか思い出さない日はなかった」と洩らした。

### トラウマとともに生きる

あの日から七〇年近くが過ぎた。残り少なくなった生存者はトラウマに苛まれて生きており、この件について語ることは辛いことだった。語られなかった大部分は推論に任せられ、後遺症の中で生き続ける彼らを遠巻きに見るしかなかった。

B29の記憶は民間伝承になった。その物語は「クルーは全員機内で死んだのに、村人は戦犯調査隊によって不当な苦痛を与えられた」というものだ。私自身も、焼山での聞き取りを通して、「言い伝え」と「歴史」の衝突を体験した。

老人たちは墜落については驚くほど詳細に語った。死んだクルーについて話が及ぶと、脱出の時に一人のバラシユートがうまく開かなかった、と皆が語った。しかし、しばらくして機体に近寄ってみると、二人の死体が後部キャビンに横たわっていた。彼らはキャビンに並び、両者ともバラシユートは半開きだった。彼らによれば、クルーが「墜落死」したのは明らかだった。私はインタビューの大部分を、彼らの思う

ままに語ってもらった。しかし、一度だけ、私は思わず口を滑らせ、自明のことを聞いてしまった。

「少なくとも一人は機体から脱出しているはずなのに、どうして彼は機内で見つかったのですか？」

人々はこの質問に不意をつかれた。彼らは私という静かな傍観者を脇において思い出話にふけていたが、今や、冷たい敵意を含んだ目で私を見つめた。

その場に気まずい空気が流れた。この面談をセットしてくれた日本人の歴史家は私のピンチを察して、口を挟んだ。

「ほら、あれは、どこか別の場所から機内に運び戻されたんですよね？」

老人たちは明らかにホッとした表情になった。

「そうそう。そういうことです。その男は発見したときはすでに死んでいたんです」

みんなの顔が安堵に変わり、地元の伝承はこうして保存された。私は次の質問をする冒険をやめた。

### 千年の歴史の中の一夜の暴力

一九四五年七月二〇日の出来事に参加した人々は、その後、長い人生を生き、拷問の地を耕し、家族を育てた。焼山でインタビュートした折、彼らの主な関心は、「今の若い者たちはパンばかり食べるようになって、前ほど米を食べなくなつた」ということだ。ずっと昔、彼らが埋めたアメリカの飛行士たちのように、彼らの孫はパンを食べる。

彼らは、手塩にかけた米とともに、無用の存在にされ、暮らしを変えないまま人生を終えようとしているのを感じていた。村人は話の中心をすぐに他にずらす。飢えたこと、あるいは高射砲陣地の兵隊が地元の娘と恋に落ちて、村に住むようになったこと。彼らは朝鮮人強制労働者のことも語った。その男が炭鉱から逃げ出したとき、どうやって村人が官憲の目からかくまい、日本語を教えたか。また、彼らは新潟捕虜収容所5Bに納める食糧を集めた話もした。間接的ながら「お前さんの同胞に協力したんだ」と言いたい意図は明白だった。

「わしらは鬼じゃない。普通の人間だ。あの七月二〇日に起こったことは、夏の一夜にヤケドしたようなものだ。千年の静かな歴史のなかで起こった一夜の暴力だった。よく見ろよ、わしらは百姓だ。米を作る。困った人を見れば助ける。どれだけ、何日も何年も働きづめだったことか。収穫の祭りや節句を祝う。それがわしらだよ」

あの日と、それを境に始まった年月の間には埋まらない断絶がある。静けさは村に戻ったが、玉虫色の平和だった。地中のB29の残骸が土地を汚染していた。機体に有害な廃棄物が残され、彼らの生命線である地中に埋められていたのだ。

ジョーダン・クルーの生き残りたちはどうだろう。癒しは同様に見つけにくい。捕まったこと、尋問されたこと。クルーそれぞれが自分の記憶と向き合って生きてきた。ジョーダン自身、戦後の人生を統御するのに苦労した。彼はアルコー

ル依存症となり、五九歳で死んだ。

他のクルーたちは彼より長く生きたが、年齢とともに精神的な懊悩は悲惨の度合いを増し、むしろ人生の暗闇のなかで港を求めて、周囲の友人や家族を悩ました。周囲の誰も戦争のことは怖くて聞けなかった。

『竹槍の村』が出版され、物語の共有が始まって何かが変わった。彼らは苦痛から解放された感覚を覚えはじめた。ウィールニックが特に顕著だった。それまで彼はすべての出来事を忘れようとしていた。そして精神障害を招き、悪夢にうなされ、老年に至るまで鬱状態から逃げられなくなっていた。

『竹槍の村』を読んで、彼は泣いた。それから彼は自分の体験をためらいなく話せるようになった。「人が変わった」と友人が伝えてきた。

人によって、ある程度の癒しは実現する。トランプのような例外もある。痛みを克服するポイントに出会い、自分を捕まえてひどい目にあわせた者の立場に我が身を重ねた。その時だった。彼らはかつての敵を縛りつけてきた縄をほどこいてあげることを学んだ。真の「ゆるし」である。

しかしこのゆるしは、遥か新潟の人々にまでは届かない。トランプはルーテル派の牧師となり、「民間人の頭上に爆弾を落とし続けた自分の役割とは何だったのか」と、生涯問い続けた。

人生の最晩年を迎え、老衰が目に見えて来ると、あの日々の記憶が彼の胸一杯に満ちてくる。家族たちが私に伝えてく

る。「彼の今の関心は、戦時中にやったことを神様が許して下さるのか、ということですよ」。

戦争は地獄——この古い格言が、トランプの心にひとときわ響いている言葉だ。

### 日米の次世代のために

文化と歴史を異にしながら、ジョーダン・クルーと新潟の村人は、等しく当時の苦しみを分かちあってきた。その体験は今の世代にも影響を与えるほど根深いものがある。

すべては、それぞれの傷ついた人生の中で孤独のうちに放置されてきた。私はジョーダン・クルーと新潟の村人たちの勇氣に、畏敬の念を覚える。ともに年齢的に極めてもうい境遇にありながら、あの時のトラウマに自分の内部で向き合い、長い長い年月背負い続けた重荷を、今やっとほんの少し軽くしようとしている。

私たちは彼らの記憶に敬意を払い、戦場に行くとはどういうことか、分かっている日米の次の世代のために、その記憶を色あせないものにしておこう。

『竹槍の村』の胸痛む物語は語り継がなければならない。新潟での暗い夏の夜、そこには英雄も悪党もいなかった。

「人は戦争から無傷で生還できるのか？」という問いがあるばかりである。